

大原幽学をめぐる諸問題について

柴田武雄

Various Questions concerning Yugaku Ohara.

by Takeo Shibata.

1

大原幽学を歴史的に評価し、その位置づけをどうするか、これはかなりむずかしい問題である。第一、彼は歴史の主流に生きた人ではない。幕末の尊攘運動に関係をもったわけでもなく、歴史の流れをかえるような事件にたずさわった人物でもない。一介の浪人として、関東の片隅の下総の地で農民たちの教化にあたり、荒廃した村々の生活建て直しに献身し、それが封建秩序のワクをはみ出したという理由で幕府の処断を受け、自殺に追いこまれたのであるが、いってみれば、

地方の一些事というにとどまり、歴史の進行に大きな意義をもたらしたわけではない。取るに足らぬ存在だと見捨てられる理由はじゅうぶんにあるといえよう。とくに歴史の動きを、もっぱら社会革命の推進という視点のみからとらえようとする人たちは、幽学のごときは——二宮尊徳と同様に——幕藩制の忠実な番犬にすぎない反動的存在として、軽蔑の対象としか考えないかもしれないのである。それを具体的にいうならば、幽学は多くの農民を弟子として、農村改革を進めたのであるが、その仕法が幕府の規制を越えたところがあつたため弾圧を受けるにいたった時、なぜ自分たちの正しさを主張し、農民たちとともに一揆を起こすところまで行かなかつたのであるか、そこまで行けば、幽学の存在価値は歴史的に大きな評価を受けたであろうのに、自

殺という敗北行為ですべてを糊塗してしまったのは、ただけないうわけなのである。つまり、幽学はどうして大塩平八郎や生田万の遺志を継がなかつたのか、それがはなはだ不満だということになる。当時は尊攘運動が各地に盛りあがり、農民一揆も頻発していて、革命の機運が澎湃としておこりつつあつたのだから、それへの認識があれば、当然、反幕行動に農民たちを結集すべきであつた。しかるに、幽学は農民サイドに立ち切れず、みずから挫折を招いた形で終つたのは、歴史の推進者たるの光栄を抛棄してしまつたことになり、したがって、彼の評価は低くならざるをえないことになるというわけである。

明治維新は、武士階級の内部革命であつて、下級武士が上級武士に取つてかわつたにすぎないという考えかたがある。一般庶民は部分的にそのお手伝いをしたにすぎず、いわば、庶民不在の革命におわつてしまつたため、封建的残滓を多くのこしたことになる、それが今日まで尾をひいていることが、日本人を不幸にしまつたといわれる。たしかにそのとおりであろう。庶民は革命バスに乗りおくれってしまったのだ。といって、農民や町人たちが幸福な社会の到来を望みしなかつたわけではない。とくに封建搾取に痛みつけられた農民は、新しい世への熱望を心の奥にもつていたにちがいない。いったい、徳川の封建体制は、農民の生産性を基盤として形成されていたにちがいないのであるが、政治は武士が握り、経済は町人が支配するという形になつてしまつて、農民たちは政治力も持たず経済力も持たない、きわめ

で無力な存在にすぎないものだった。いうまでもなく、歴史を動かすのは、政治と経済の二つの力である。その二つとも保持できなかったところに、農民の悲劇があった。もっとも、彼らは黙っていたわけではなく、各地に一揆を噴発せしめて、幕藩制の基礎をゆるがしはしたが、結局は感情的反発の範囲を出ることはできなかったのである。

「すなわち、かれらは一般に幕末時、生活の心配と先行きの不安の中で、新しい時代の到来をひたすら待ち続けただけであって、幕末の志士のごとく自ら積極的に歴史形成に挺身しなかった。この限界はせっかく獲得しつつあった農民本位の傾向を、その後明治維新政府によってすりかえられた原因だけに、農民側の大きな限界といえよう。これは農民が農民エートスの合理的エートスのもつ、維持・創造という性格のうち、創造のエネルギーを伸長するのに不得手だったことによる。幕末期農民が幕藩体制を崩壊させた面は明瞭でも、明治維新政府をつくり出した面が曖昧なのはこのためであろう。

(中略)幕末・維新期の為政者・指導者と農民の間には、農民第一主義という共通の大前提があったにもかかわらず、ついに両者が協力して、農民本位の維新政府をつくりえなかったところに、幕末・維新期最大の悲劇があったらう。」(1)

これは、布川清司氏の説くところであるが、全くこのとおりにはない。この悲劇は、農民が政治から遮断され、「愚民」として扱われ、学問からも遠ざけられ、歴史的創造力を持つことのできなかった近世農民たちの社会的不熟の必然的な結果であったといえよう。

2

二宮尊徳と大原幽学とは、同じ時代に同じような仕事をしたことでよく比較されている。尊徳は幽学より十才の年長で二年早く死没しているが、幽学が房総に足をふみ入れた天保二年(一八三一)には、尊徳は四十五才の働き盛りで、有名な桜町仕法を八年間の苦闘の末、ようやく成功せしめて、名声を高めていたのであった。おそらく幽学は

尊徳の名は耳にしていたにちがいないが、尊徳のほうではその後の幽学の活動をどの程度知っていたであろうか、あるいは全く知らなかったかもしれない。両者が顔をあわせたことは、一度もなかったろうと思う。周知のように、尊徳は農民の生まれであるが、小田原藩士に登用され、やがて幕臣に拔擢された人である。だから、その荒村復興の多くの仕事は、幕藩制政治の一環として行なわれたもので、いわば、上から下への姿勢を執ったとは見られるが、彼のえらさは、農民の本領をどこまでも失わず、あくまでも農民側に立って、事業を進めていったところにあると考えられる。彼の報徳哲学は明らかに農民魂の結晶であり、自己の体験と思索を基軸として、儒教・神道・仏教の理念を借りて体系づけていったものである。すなわち、農民精神を主体として理念形成が行なわれているところに、独自の意義があるといえる。奈良本辰也氏は、尊徳の思想は、思想史的に見れば、安藤昌益から本居宣長を経て尊徳につながったと見て、昌益は「徹頭徹尾農民の側に立った思想家」で、「一切の罪惡の根源を支配階級そごうきの存在にみた」とし、宣長は名高い「秘本玉くしげ」のなかで、「抑此事そもその起るを考ふるに、いづれも下の非はなくして、皆上の非なるより起れり。」といひ、その考えは、「封建社会の指導理念を形成する儒教批判」をするという形でレジスタンスをしていると説明する。(2) この流れのつづきが尊徳の報徳教となるというわけであるが、尊徳は農民に生まれながら、幕臣となったのは矛盾していやしいかという問題がでくる。しかし、尊徳は武士になりたくてなったわけではない。「彼が水野(忠邦、当時幕府老中)に登用されてそれを断らなかったのは、もっと大きな仕事やりたかったのである。つまり、荒廃し切った関東地方の農村を復興させることなのだ。」と奈良本氏は見る。(3) そして、「尊徳は、あくまでも農民の立場に立っていたのだ。彼の理想は、農業によって自然の富を開発し、豊かな農村と安定した農民の生活をつくり出すことにあったのである。だから、その点を第一として考え、そこから領主の分度を決めるというようなことをやっているのだ。領主の生活が先にあって、そこから農民の分度が決められる

というような例は一度もない。」(4)

と、説いている。すなわち、農本主義・農民第一主義を幕政の場で貫いたのである。この政治的意義は決して小さくはない。従来、尊徳に對しては、かなり手きびしい批判が出ていた。一、二の例をあげるならば、「尊徳の生産力増加は、技術の改良を伴はない労働強化のみに依存するものであって、封建社会の崩壊過程に伴う農村の荒廢の対応療以上に出なかった。」(家永三郎氏)⁽⁵⁾「尊徳の計算は開發される土地が無限にあるという空疎な前提にたっており、封建貢租の撤廢と技術的条件の變革こそが新たな開發の第一の前提であることがまったく見落されている。」(安丸良夫氏)⁽⁶⁾といったようなぐあいだ、要するに、彼の事業は封建制の維持に力を貸したにすぎず、農民の解放にはかなり遠いものであったという評言である。こういう批判の聲に耳をふさぐわけにはゆかないが、歴史の現実をみつめて、命をかけて遂行した彼の仕事の意義あるところを見失ってはいけぬであらう。そこで、次に、筑波常治・小椋嶺一・八木繁樹三氏の論を聞いてみることにしよう。

「尊徳の方針は、幕藩体制の現実をあくまでも前提にしていた。かれの業績を評価する場合、体制批判の視点がないからだめだなどといういいかたをしたら、身もふたもあるまい。当時の農民にとって、封建社会はうごかすべからざる制約であった。そのわくのなかで、いかにしたら農民が生計をたてられるか、尊徳は死にものぐるいで模索したのである。」(筑波常治氏)⁽⁷⁾

「我々は尊徳の思想の体制順応を嘲することはできない。なぜならば、彼の説く共存共栄は当時の農民、村落共同体に適合したものであるからである。主食の生産者でありながら生きて行くのが精一杯の農民にとって、尊徳の経済即道德即餓えない生活の教えがどれほど心強く聞こえたかは、容易に理解できるであらう。たとえ、反封建的でなくとも、尊徳の思想は重い貢租にあえぎつつも、生活の向上を計る農民のエネルギーを鼓舞したのである。」(小椋嶺一氏)⁽⁸⁾「反体制とか革新とかいうと、すぐブラカードでも立ててデモをや

り、氣勢をあげることを考えるが、尊徳の反体制はそんなものではない。体制側をも納得させて、ついには協力させ信奉させるものだったのである。唯々、偉大というほかはない。封建制度の磐石な時代に、そのきびしい現実の中で、いますぐ庶民を救済し理想郷を建設する手段として、あの封建制そのものを直接ぶちこわすことが、實際問題としてできたであらうか。やろうとすれば、大塩平八郎のような結果に終わるだけのことだ。庶民は決して救われぬ。尊徳はそのことをよく知っていたのである。百姓一揆すらできない農村で、農民たちはどうしたら豊かに幸せになれるかを考え、それを実践する、それが二宮尊徳が推進し成功した漸進的革新政治だったのである。それは結果的に、領民も領主も、みんなが共に喜び合えるもの、すなわち共同共栄の政治だったのである。これが報徳の真髓である。」(八木繁樹氏)⁽⁹⁾

こういう見かた考えかたは、世のラディカリストたちはさぞ嘲笑することであろうが、人間の生活の本源に心をおいてみれば、右のとき努力の中にこそ、ほんとうの正しさがあり、人間らしい営為があるのではなからうか。われわれは革命方式の歴史観に立つて、ビンビン批判の刃をふるう勇ましさをばかりに拍手をおくることなく、人間生活の實態に根をおいた歴史観を持つべきではないか。わたしは二宮尊徳に對する評価の例をいくつかあげてみたが、実は大原幽学のばあいにも、これらの評価はそっくりあてはまると思うのである。この二人は同時代に同地域で、民衆教化という同じような仕事をしながら、二人とも当時の政治情勢には、きわめて無関心であった。時勢不感症といつていいほど、彼らは政治的動静にはインタレストを寄せなかった。たとえば、水戸藩は尊攘の爆弾をかかえこんで、その波動はようやく心ある人々の心意を刺戟しつつあった時である。尊徳は幕臣となったのだから、立場上、尊攘運動などに気をそらす余裕など持てなかっただろうという考えかたもできよう。幽学は浪人であつて、尊徳よりも政治情勢には敏感になりそうな立場にいたと見られる。幽学は下総へ来ても、水戸方面に旅行したこともあり、義公(徳川光圀)を尊敬して

いたらしい形跡もあり、また、下総香取郡長部村(現・千潟町長部)に改心楼を建てたときも、水戸藩内の郷学延方学校を範としたと思われるふしもあり、また、水戸藩の天保改革における農村革新事業に刺戟されて、下総の村々の改革をはかったと想像できるフシもある。さらに、水戸藩士の幾人かが幽学の門弟になっていた事実もあつた。しかし、事、政治問題になると、全く反応を示していないのである。勤王武士と交わつたような形跡もないようだ。すなわち、彼の眼は政治には向けられず、まっすぐ民衆の生活に焦点をあわせていたとしか考えられない。尊徳の視線も同様だった。そして、かりに尊徳が幕臣にならなかつたとしても、彼の視点は民生からそれることは絶対になかつたろうと察せられる。

3

幽学はなぜ幕府の嫌疑を受けたのであろうか。尊徳と同じような仕事をしたのに、何故に処罰されなければならなかつたのか。その因由はいくつかあげられるであろうが、まず考えられるのは、彼が浪人の身でありながら、多くの民衆に深く接したということである。幕府は浪人が農村に居住することを早くからきびしく禁じていた。それは、浪人は反幕的な考えを持つ傾きがあり、民衆を煽動して不穏な行動に出るおそれがあったからである。そのために、幕初から幕末にいたるまで、くどいくらいに禁令を何度も出しているのである。もっとも、実際には生活にあぶれた浪人たちが何かの縁故をたよって田舎住居をし、寺子屋を開く等の仕事をして、わずかに糊口をしのいでいたぐらいのところである。それには、村役人が身分保証をして人別に加えるようにしなければならなかつた。しかし、幕末になると社会不安がひどくなって、浪人の数もふえるし、学者文人などが地方へ落ちてくるものが多くなって、自然に取締りもゆるんで、大目に見られるようになり、したがって村内居住の浪人たちも数を増していった。とくに房総地方のごとくいわゆる入組分給の体制をとって、領主が遠くにいる

ために支配の行きとどかないところは、名主などの手ごろで融通のきく面があつたので、浪人たちの入り込みが多くなっていった。もっとも、それには、村人たちのほうで、学者や文人や武芸者など、特殊な学識技能の持主に村へ来てもらって、いろいろ教えを受けようとする傾向つまり、浪人たちを歓迎する空気もあつたのである。しかし、そういうのはだいたい村の上層階級で、生活に余裕のあるものだけのことであつた。浪人たちのほうでもそういうものを頼ってきて、村に定住しないまでも何か月か滞在して飲食にありつき、やがてまた他の村へ移つてゆくというありさまであつた。

幽学は民衆教育者と見ることができ、その本質は英国あたりでいう遊歴教師(travelling teacher)であつたと考えられる。彼は一生を独身でとおし、もちろん妻子縁類を持たず、天涯孤独の身を関西から関東へ運んできて、各地に門人を作りながら、下総へ落ちついたのである。落ちついたとは云いながら、彼の心はその本拠である関西に帰りたくて、始終ゆれていたのである。ただ、下総に三千人と称される門人ができ、それを振り切つて帰西するわけにもゆかず、門人たちも彼を永久に引きとめておきたくて、長部村に彼のために住宅を営んで帰西を思い止まらせてしまったのである。つまり、下総の門人たちには幽学という教師がぜひとも必要であつたのであり、彼を失つては生きてゆけなかつたと思つていいと思う。だから、幽学の民衆教化活動は、下総の農民たちの自主的な意志にもとづいて、展開されたと考えることができると思う。

ところで、浪人がある村に定住して、村内の子供たちに読み書きを教えるだけであつたなら、何のこともなく平穏な状態がつづいて、むづかしい問題もおこらずにすむであろう。幽学のばあいも、彼が長部村に住んで、その村の人たちに読み書きだけを教えていたとするならば、領主と村役人の保証さえあれば、無事平穏に一生をおわることができたであろう。だが、彼の教えは長部村を越えて他の村々へおよんでゆき、下総の香取・海上・匝瑳各郡から遠くは印旛・埴生の二郡にも伸びていったのである。(10) その村々はもちろんそれぞれ領主が別

である。清水領あり田安領あり稲葉領あり、その他多くの旗本等の知行分給にわたっていた。そうすると、支配関係から見てもずいぶん複雑であり、それぞれの領民たちは本来の領主の支配を受けながら、別に長部村に本拠をもつ大原幽学という浪人の教化を受けることになる。幽学は領主たちから委嘱された代官というわけではないのに、いつてみれば、私設代官みたいな形で領民たちの生活指導にあたっていたというわけだ。それも、ただ読み書きの指導を受けるのではなく、農事や生活活動について幽学式の教化を受けるとするならば、彼らの心は本来の領主をはなれて、幽学へ幽学へとなびいていってしまうおそれもある。領主のいうことはきかずに、幽学のいうことなら聞くという事態にもなりかねないだろう。とすれば、幕藩制にヒビがはいり、ゆゆしき大事となる危険性はじゅうぶんにある。

ところで、幽学の教化活動が右のような拡がりをもたらしたのには、当時の農民たちの心をキャッチするだけの良さがあつたためにほかならないが、その基軸となつたのは、幽学が門人たちをすべて道友として、貧富を問わず平等に友愛をもって横の結びを強化するという方策をとつたところにあつたと思う。つまり、民主的なヨコの社会づくりを志向したところが庶民の気持を引きつけたのである。いうまでもなく、当時はきびしい身分制によるタテ社会が絶対的な原則であつて、これを破ることは許されなかつた。いわゆる士農工商の階層を永久に固定し、その各層の中にまたそれぞれの階級をつくつて、上下の身分差を不動のものとしておくのが基本方針であつた。上は絶対に下を支配し、下は絶対に上に従うというのが、封建秩序であつた。しかし、上は人数が少ないが、下は多い。多い下々人民が互いに団結したら大変なことになる。だから、下剋上は許されるはずがなかつた。百姓一揆が手きびしく取締られたのも、人民のヨコの連合をおそれたからである。幽学が行なつた道友主義の教化運動は、それが村々をつなぐ広い組織に発展すれば、そのまま放置しえないのは当然であつた。友愛を重んじた幽学は、その具体化として、協議主義の運営法を持ちこんで、家においても村においても、じっくり協議を遂げて、お互いの納得す

くで事をはこぶ道を奨励していた。たとえば、村役人の心得として、幽学は次のように教えている――

「村役人を勤るニハ、自分了簡を用ヒズ、村中之者に智恵をかりて事を計ふが第一也。猶亦、御上^{かみ}江出ても何事ニよらず私ハ不器量もので御座るから、一応村方へ相談之上、御挨拶申上とう御座る。

一先日延を願へば、其方が上江の通りが宜しい。」^{ひとまず}(11)

こんな言葉にも、彼がいかに合議による生活運営を重んじていたかがわかるのである。そこで、わたしは思うのだが、幽学の胸にえがかれていたエル・ドラードは、友愛的共同社会、フレンドリー・コミュニティといったようなものではなかつたろうか。

4

幽学には人間そのものを重視する考えかたがあつた。身分が低ければこれを軽く見るようなことはなく、どんな人ともヒューメンな心で接するようにしたのである。それが多くの人民たちから慕われた根因であつたといえよう。ただ、彼の人間観は、人間を個人としてないしは個性としてこれを重んずるところまで行っていなかつたように思われる。すなわち、彼の世界観の中心は「家」におかれていて、人間は「家」の構成員、家族の一員としてその存在を認めるといった考えかたをしていたようである。人間を「家」から抽出された独立人間として考えるところまでは行かず、「家」の秩序を構成する存在、すなわち、父・母・夫・妻・子・孫という位置づけをされた人間として考えていたようである。そして、「家」は先祖から承けつがれ、子孫へ永続してゆく、人間のもっとも大切な生活単位として重視されたのである。であるから、友愛といつても、個人同志のそれというより、家同志のそれという形であらわされることになってくる。したがって、幽学の人間重視は、資本主義時代の個人主義理念までは達しない。封建時代の家族制の苗床に立つアイディアであつたといえると思うのである。右のような事情で、幽学の民衆教化の対象は、そのはじめにおいて

は一人一人の人間が入門するのであつても、やがてその家族全員が皆入門するということになって行き、さらにそれが他の家とつながりを持つというふうに、家連合の形をとって進み、それが村連合へと伸びるというプロセスをふんでいったのである。こうして、「性学」一派（幽学の教化はふつう「性学」とよばれていた。また「性理学」ともいわれた。）の連合組織が形成されていった。だが、そうなれば、性学以外の一般農家との関係がうるさくなってくる。もちろん一般農家のほうがはるかに多いのであるが、長部村のように一村こぞって性学に加入していれば問題がなければ、性学派の家と非性学派の家とが混在している村では、そこに対立的問題がおこることは容易に想像できる。たとえば、婚姻その他の縁組のばあいにも、ややこしい紛議をかもしやすいことになる。

「性理学相学び候ものの子供は、家内熟和の中に成長する故、近辺通例不_レ宣_ル風儀の方へ縁付き、不_レ宣_ル風俗に押移候儀に存じ、可_レ成_ル文は道友の中へ縁付候得共、大勢の事故、道友の内へ計_ハ縁付候儀には無_レ之を、性理学を嫌候もの杯怪敷旨を風評仕り候得共、右の次第にて如何は敷筋等更に相聞え不_レ申候。」(12)（句読点・訓点・よみがなは柴田、以下同じ。）

これは、嫌疑一件の際に幕府探索方から報告された書状中の一節であるが、こういう対立関係に発展しやすいことは、性学派の勢力が伸びれば伸びるほど、当然のなりゆきだといふことができるであらう。

ところで、幽学が民衆教化を行なった下総の東部地方は、天保水滸伝で知られる飯岡助五郎・笹川繁蔵らの縄張りであり、農民が幽学の教化を受けて博奕をしなくなれば、お客さまを失うわけだから、彼等は幽学の存在を無視するわけには行かなかった。助五郎と繁蔵とはたがい敵同志であつたが、博徒という同じ立場から見れば、幽学は共通の敵であつた。しかも、当時は九十九里沿岸地方や下総の東部地方の村々の役人には、博徒上りや博徒とつながりのあるヤクザ的な人物が成り上つてその地位につき権力をふるっている者が多かったのである。長部村の近村万才村の太右衛門は近辺清水領の大惣代として、ま

た、上総横芝村の清三郎は近辺村々の惣代として、博奕喧嘩その他の悪事に携りながら、幕府の八州廻り役人たち、正しくは関東御取締出役の侍たちに賄賂をつかつてうまく取り入り、それに利根川向う土浦町大惣代佐左衛門からもグルとなり、幽学一派の教化活動の邪魔にはいり、いろいろとこしらえごとをしては、まことしやかに八州役人の耳に吹きこんだのである。たとえば、幽学の行状については、「幽学は門人共の妻女等自由に致し、又は教導所にて巾着差出し置き金子_ヲ為_レ入食取、或は脇差其外器物買入、門人共へ高直に売渡し利潤を貪り候杯、根もなき流言致し」(13)と、全くのウソ八百をこしらえあげ、また、教導所（改心楼）については、「教導所を無年貢の持山に地形致し取建候得共、自儘に田畑等押潰し候様風評申触れ、僅かの板橋を掛け候を銅の橋を掛け候杯申触し、山々の中腹より水沸出し候を見受け、夥敷泉水の由に申触れ、大普請の節土取残し置候を富士の形に築山相仕立候由申触し、浮説取捨へ」(14)と、誇大に報導したのであつた。いったい、八州役人は関東地方の治安を取締るためにおかれたものだが、小人数で手廻りかねるので、道案内人と称して、博徒を手先につかい、毒を以て毒を制する方法をとつたのであるが、これが博徒をはびこらせる素因をなしたのである。もともと薄給な八州役人たちは、博徒を手なずければ、悪銭が懐中へ入ってくるので、心ならずも彼らを利用したので、彼らがだんだん政治力をにぎり、村役人になって威張りちらすようになっていったのである。そういう点を幕府探索方はどう見ていたであらうか――

「八州取締出役、手先又は道案内等と唱へ候者の邪智利勘、風俗を敗り良民を難_レ致候儀、当時甚敷事に御座候。（中略）……八州巡りの眼前を取繕ひ候得者、何事も銘々存意の通り、或は賄賂を貪り奢侈横行を行ひ又は才氣に慢じ、愚直の百姓共を迷惑_レ致候儀杯、何れも年来金錢等自由に融通出来候より、次第々々に悪癖相募り、右様に相成申候。尤も、八州廻りの者第一正路潔白にて村民を教諭撫育の心掛けに候得ば、左様には有_レ之間敷、全く自己の用弁を存じ量り、良民に難_レ致無_ニ此上_ニ事をも不_レ顧、此節別て甚敷と相聞申候。」(15)

この報告によって、大方の察しはつくことと思う。

こういう暴圧勢力に対して、幽学はどのような態度でのぞんだであろうか。彼は断じて妥協はしなかったのである。むしろ、そういう害毒から農民を守ろうとして挺身したといつてよいだろう。といつても彼らと暴力をもって戦おうなどとはせず、教化力によって彼らを改心させることを理想としたのである。幽学がやぐざ連中に対して断乎たる態度に出ていたことは、左の門人あての書簡によって察知することができよう――

「布野村(今の東庄町)市左衛門事、先日岡ッ引様の者見へて、布野村において性学の者何人有之候。若し尋も候はば頼とか申候由相聞候。岡ッ引如きに下た寄りケ間敷者は、此方へ足入一切相成間敷、能々穿儀(詮議)之上、其由屹度可被申渡候。」(16)(カッコ内注は柴田)これは布野村門人市左衛門が岡ッ引(目明し)と妥協しようとしたのを咎め立てたのであるが、どこまでも道を貫こうとする幽学の気概がうかがわれるであろう。

ところが、ここに注意すべきは、八州役人の全部が全部、幽学教化に対して冷めたい眼を向けていたのではなかったことである。というのは、門人の弁疏書(嘉永五年七月)の中に、

「右御取締様御四人の内、御銘々御異存にて、下総国佐原に於て、種々御手強き御議論に有之、中山誠一郎様・関畝四郎様には何分学問筋偏屈の由にて、思召に不応、吉岡静助様・渡辺園十郎様には至極善道にて、箇様の教方は民家の為め宜敷く、教導所の実に風俗人氣の為め可然旨の御見込に御座候由、確と承知仕り候。」(17)

と書かれているからである。右の四人のうち、中山誠一郎は頭領株であったようだが、この男はなかなかの才物であつたらしく、後年(文久四年)九十九里片貝を中心としておこった真忠組騒動の際には、幕府の代官として総指揮にあたるほどに出世をしたが、その行状にはとかくの悪評があつた人物だ。この中山が関とはかり、嘉永四年(一八五一)四月十八日、松岸村半次・鎗木村栄助・牛渡村忠左衛門・同手下男嘉兵衛・同村政兵衛らに内命して、長部村の改心楼へ探索のため

乱入させ、それがきっかけで、幽学の嫌疑事件が勃発するにいたるのである。この事件を幕府の公称では、「牛渡村一件」といつていたが、それは、前記の忠左衛門が首謀者とみなされたからである。牛渡村は土浦(茨城県)の東方にある村で、忠左衛門はその村の組頭をしていて、前出土浦大惣代佐左衛門の子分であつた。また、半次は飯岡助五郎の子分で、「天保水滸伝」に風窓の半次という呼び名で登場している男だが、この男は中山誠一郎にうまく取り入って、博徒間で幅をきかしていたのである。

かくて、幽学は翌嘉永五年(一八五二)二月、関東御取締出役から銚子在の本城村に呼び出されて取調べを受け、同年十月江戸出府を命ぜられ、評定所の吟味を受けることになり、ここに晩年の厄難期はじまり、悲劇的な結末を迎えるにいたるのである。

5

さて、この事件においては、いろいろな嫌疑問題が吟味されたが、幽学自身にとって最大の難問は、彼の出自が明白でなく、結局は無宿浪人の烙印を押されそうになったことである。幽学は自分の素性を語ろうとしなかったといわれるが、彼自身の署名したものには、「大道寺実生」とか「大原左門」「大原家信」などいろいろな書きかたをしていた。門人たちの間では、尾張徳川家の家老職大道寺玄蕃(直方)の二男に生まれたが、十八才の時故あって浪人した人物だと思われていた。しかし、幽学の死後、研究家が調査したところでは、それを証明するだけの正確な資料がなく、疑いをのこしたままになっている。ところで、幽学が幕府の嫌疑を受けるにいたって、身分書の提出を求められたので、「御尋に付以書付奉申上候」という表題で、関東御取締役中山誠一郎ほか三人に呈出した書状には、

「私儀、御本丸御小人目付高松彦七郎弟にて、六歳の砌り尾州家来へ養子に罷越、仔細有之、十八歳の節離縁仕、夫より浪人にて国々廻歴仕……」(18)

と書き記している。ここには、大道寺の名も大原の名も出てこない。この書状は嘉永五年（一八五二）六月に出されている。ところが、同年十一月、右の高松彦七郎は、上司の御小人頭足立鉄平を経て御用番御目付大久保彦左衛門へ嘆願書を出し、その冒頭に

「

浪人 大原幽学

右私弟幽学儀、実父悦治郎在生の砌、尾張殿元御家来大原左近方へ養子罷越、其後離散仕り、学問修行として諸国経歴致し候儀に御座候得共、右離散後は実父悦治郎儀相果、跡退転仕り候……」（19）

とある。以上を総合してみると、幽学は高松悦治郎を実父として生まれ、兄が高松彦七郎であるが、幽学は六才のとき、尾張徳川家の浪人大原左近の養子にやられ、十八才のとき離散し、その後実父悦治郎とも死別してしまった、ということになりそう。これをそのまま信ずると、大道寺家の出という説は否定しなければなくなる。ところが、最近、名古屋市の郷土史家水谷盛光氏が「一宮市史」（資料編八）所収の「清須代官触書」の中に、幽学の身分調査についての触書が出ていることを紹介された。それは、次のような文面である――

「浪人大原幽学と申立候者、名古屋東出来町ニ住居罷在元御家来ニ而退身いたし候浪人大原左近養子ニ成、文化三寅年東出来町引弘、左近一同国々遍歴いたし歩行候内、左近ハ相果候旨申立候由ニ而、訂方之儀申談有之候。付而ハ、前頭之左近と申者無之哉、村中篤と相訂、早々陣屋へ可ニ申出候。且、右体之者無之候バ、其段村下ニ下ゲ札いたし、刻付を以て相廻し留村より、来ル三日迄ニ可返候。已上。

（嘉永五年）

十一月朔日

深 新 平（20）

これは、幽学の養父大原左近の身元調査を幕府から尾張藩に依頼してきたので、清須代官が管下村々へ出した触書である。これによれば、大原左近は名古屋市東出来町（現在の東区古出来町あたりという。）に居住していたが、文化三年（一八〇六）にそこを引き払ひ、一家で放浪しているうち、左近は死去してしまったという。以上のことは幕

府のほうで、幽学に問いただしたかどうかしてたしかめ、左近の實在如何を調査せしめたのである。これは、調査依頼の文書であって、その結果、どういうことになったか、回答書がない以上は何ともいえないわけだ。

ところが、前記水谷氏はその後の調査で、同じ愛知県の「豊明市史」（資料編一）所収の鳴海陣屋文書の中に、やはり幽学関係の次のような触書の出ているのを発見されて、わたしのところへそのコピーを送って下さったので、掲出してみる――

「浪人大原幽学と申立候無宿幽学申者、御府内浪人高松悦次郎次男にて、享和三亥年中、名古屋東出来町ニ住居罷有元御家来ニ而退身いたし候浪人大原左近養子成、文化三寅年中、東出来町引弘、左近一同国々遍歴（歴）いたし歩行候内、同人相果、付而ハ前頭之左近と申者、其村々無之哉吟味いたし、有無之境書付を以、此状看次第可ニ申出候。承知之上、刻付を以順達、納村より可返候。以上。

（嘉永五年）

十一月朔日

鳴海 陣 屋（21）

（以上、二文書の句読点・読みがな・訓点・注・傍点は柴田）

これは、前の「一宮市史」のと同じ時に出されたものであるのに、傍点を施した部分（後の方にも表現のちがう箇所があるが）は「一宮市史」のほうにない文言である。このちがいはどうして生じたのだろうか。「豊明市史」のほうがよくわしく書かれているところから見ると、「一宮市史」のほうは省略して出したものと考えてよさそう。さて、この触書に「高松悦次郎次男」とはつきり書かれているのは、

高松彦七郎が自分の弟として届けたのを、幕府は一応認めたことになっているのだろう。しかし、「無宿幽学」とあるのは、何としてもショッキングなことだ。この無宿問題はあとで検討することにしたが、次には、「享和三亥年」（一八〇三）に幽学は大原左近の養子となったとあるが、幽学が寛政九年（一七九七）に生まれたという通説にしたがえば、この年彼は数え年七才であったことになる。これは前引の書

状にあった「六歳の砌り尾州家来へ養子に罷越」とあるのと一年のち
 がいがあることになる。(当時の年齢計算は数え年が普通であった。)

どちらが正しいか何ともいえないが、その当時は東出来町に住んでいた大原一家は、文化三年(一八〇六)に引き払ったわけだが、この年幽学は十才であったはずである。それから、大原一家は「国々遍歴」をしたことになる。国々とある以上、名古屋周辺といった狭い地域ではなかっただろう。が、どのくらいの範囲を放浪していたものかはわからない。また、どのくらいの間そういう生活をつづけ、その果てはどうなったかも、見当がつかないが、幽学自身は前引の書状で、「仔細有之、十八歳の節離縁仕」と書いているので、十八才まで一家と放浪生活をしていらしいことが想像できる。だが、「離縁」したとなると、早い話が大原姓を名のるわけにもゆかなくなるはずだ。これについては、当時の幕府勘定奉行本多加賀守の調書の中に、「幽学儀、養家退転後一分を立、大原姓相名乗、学問為_ニ修行、所々遍歴いたし候……」(22)とあるのから察すると、大原一家はあるいは百姓町人の身分に成り下がったか何かで、少なくとも武家としての面目を維持できなくなってしまったので、幽学は家名を残さんとして、修行に出た。「一分を立」てるとは、武門の名譽を守ろうということで、幽学だけは武士の一分を立てとおす信念で、あえて大原姓を名のるようにしたということでもあろうか。

以上、いろいろ検討してみたが、大原幽学が尾張名古屋の出身で尾張藩士の流れをくむ武士であったこと、また、「大原」が彼の養家の苗字であったことなどが、かなり確かな事実らしいことは想察されるけれども、確証があがったわけではないので、今の時点では断定的なことはいえないであろう。

6

そこで、次の問題は、幽学が高松悦治郎の次男であり、高松彦七郎の弟であるというのは、はたして事実かどうかということだ。結論を

さきにいえば、これは、ウソであり、デッチアゲであるといえる。

高松家というのは、もともと長部村の百姓で、本姓は遠藤と称していたのが、幕府の御家人株を買って、武家に成り上がったのである。幽学の門人の中に、長部村民で遠藤幸八郎というのがあったが、これが高松家の親戚すじにあたっていた。(23) 幸八郎のほかにも、長部村の門人には、高松家の縁引きは多かったのである。高松家のことについては、幽学の研究家で、「大原幽学全集」の編集者だった鶴田恵吉氏(とく)がくわしく調査して、雑誌「伝記」(昭和十一年十二月号)に発表したことがあった(24)が、それによると、高松悦治郎の父は遠藤茂兵衛といい、武士になりたい希望をもって長部村を出、幕府の御家人高松家の微禄に乗じて、その株を買い取って御家人となり、高松姓を名のったが、長部村の実家は廃家となっていた。(後に諸徳寺村の菅谷又左衛門の子が養子となって再興した。)茂兵衛の子悦治郎は父のあとをついだのだが、彼には三人の男子があり、長男は彦三郎、次男は彦七郎、三男は衡と称した。彦三郎は当然悦治郎のあとをつぎ、幕府の御小人目付として芝榎町に住み、次男の彦七郎は分家したが、これも兄と同じ御小人目付の地位を得て、小石川茗荷谷(みょうがや)に住むことになった。三男衡は縁あって幕臣山崎家をつぐことになり、三兄弟そろって下級武士ながら直参となることができたのである。幸運というべきかもしれない。ついでながら、幕末になると、幕府御家人の中には生活に窮して幕臣の体面が保てなくなつて、その株を有福な町人百姓に売ってしまう事例がかなりあったのである。勝海舟の祖先も御家人株を買って幕臣になったのであり、樋口一葉の父則義も、甲斐の百姓だったのが江戸へ出て金をためて、御家人株を買い武士に成り上がったのである。さて、高松三兄弟は長部村出身という縁故もあって、幽学の教えを受けるようになり、熱心な庇護者として、幽学の危機を救う働きをするまわりあわせになったのだった。三兄弟の年齢などははっきりつかめないが、次男の彦七郎が幽学の兄になれる年齢ならば、嘉永五年(一八五二)に幽学は五十六才となっていたから、彦三郎・彦七郎は当時六十才前後の高齢であったわけだ。衡はかなり若かったよ

うに思われる。この人は幽学の死後、遠藤良左衛門に師事し、「性理学実行評論」などという文章を書きのこしている。「幽学全書」所収）また、衡は明治政府に仕え、権大録という地位についていたようだ。

彦三郎・彦七郎兄弟は前記のようにいづれも、御小人目付という役職についていたのであるが、御小人目付とは若年寄支配の御目付の下役で徒目付より一段低い地位であり、その仕事は御目見以下の幕臣を監察し糾弾することや、必要によって奉行所などを巡視したり、隠密の役目をもって、旗本や諸侯の素行調査にあたったり、將軍御成りの際には先驅の役をつとめたりすることであった。人員は百人位おり、十五俵一人扶持御譜代席ということであった。もちろん、軽い身分だったが、仕事は檢察という他から警戒される仕事だったし、地方役人からすれば、いわば本省づとめという重みもあったので、幅のきくところもあつたようである。したがって、八州役人も遠慮しなければならぬところもあつたろうし、幽学たちにしてみれば、こういう味方を得たことは、力強かつたにちがいない。しかし、彦七郎が幽学を自分の弟だというこしらえごとをして、無宿から救おうとしたのは、いくら何でも大きな冒険だったろう。それを敢えてやったのは、幽学への傾倒がいかに深かつたかを語ることで、普通の立場ではとても出来ないことであつたといえよう。まともに行けば、免職はおろか、切腹に追いやられそうなことだったろう。とにかく、幽学は犯罪容疑者なのである。それを、いかに低い身分とはいえ、檢察の責任をもつ者が、偽証という悪事をあえてやろうとは、氣ちがい沙汰というよりほかないであろう。いかにこの行為が異常であるかは、これ以上説明の要はあるまい。ところでここに、幽学が嫌疑のため出府中の生活を日記に記した貴重な資料がある。それは、（前にも一部引用したが）幽学の弟子で長沼村（下総埴生郡）の農民成毛五郎兵衛が書き留めた「在府日記」である。全部で五冊あるが、嘉永五年（一八五二）十二月から、安政五年（一八五八）三月幽学が長部村で自刃するまでのことが、こまかに記されているものだ。ところで、その第一冊（元の巻）嘉永六年（一八五三）三月二十三日のところに、次の記事がある――

「……是迄越度なく尽し、其上、何れニ相成候共詮方無しと一同覚悟を定め、譬、性学潰されても、教導所取はぐしになるとも、永々之江戸詰之者へ、死（ぬ）るとも生（き）るとも俱ニ此道を立（て）ないではおかぬと、云はず語らず、以後之決定仕候。」

と、師弟一同不動の覚悟であることを書いてあり、翌二十四日の記事中には、

「……高松様弟と云通せば、高松様江御咎掛る趣、大先生（幽学のこと）方ハ咎メハ軽い。高松様思召ハ、譬ひ何れの咎を蒙り、何れの御身分ニ相成候共、大先生無宿者と被_レ致候を難儀ニ思召……（中略）磯部様被_ニ仰聞_一候ハ、何レニモ此方之差図する様にはならぬが、高松公も是迄兄弟之趣ニ申立、猶亦、拙者方へ参り急度申事ニ而、御重役方江も此方より申上て有る。夫を今更幽学無宿者と陥る様な事でハ、拙者之身分ニもかわり、事ニよれば、役を遠慮せずばなるまい。……」

とある。さらに、次の二十五日の記には、

「高松様御親子御二方之相談極つて……御身分何れニ相成候而も、道の為には決而跡へは引かぬと、御家内御一同必死と走り立帰候。一統、性学が何れに相成共、御三方様江恥ハかせないと、一心決定仕候。」

とある。引用中の「高松様」は彦七郎のこと。「高松様御親子」とは、彦七郎とその嫡男力蔵のこと、また、「御三方」とは幽学と高松親子をいったものと考えられる。高松親子の決意は、今後、身分境涯にどんな変事が来ようとも、幽学を無宿者から救わずにはおかぬと、武士の一分を立てとおす覚悟を示したのである。ここに見るのは、宗教信者の悲壮な殉教の精神というもののような気がする。ところで、「磯部様」という名が出てくるが、これは何者であろうか。文言によると、この人物は高松彦七郎の決意に共鳴し、事件に一枚加わっているように見受けられる。重要な関係者のようだ。この人物は磯部寛五郎といい、徳川御三卿の一たる田安家の代官なのである。下総には、荒海村・幡谷村・南羽鳥村・飯岡村等の田安家の領知があり、その村

々には性学門人も多く、特に荒海村（現・成田市荒海）はその中心村で、教導所も設けられていたのである。磯部は田安家の代官として、性学に非常に好意を示し、また、その保護者でもあった。嘉永五年（一八五二）三月、荒海村に教導所が建てられた時も、磯部代官は進んで協力し、代官役所の名で「定書」⁽²⁵⁾を書きあたえている。また、荒海村性学の世話役であった糸川平右衛門が亡くなった時も、磯部は心からの悔み状⁽²⁶⁾を書きおくっているのである。嫌疑一件の際も、磯部は相談相手にもなり、高松彦七郎に対しても協力を惜しまなかったのである。しかも、磯部代官ばかりでなく、田安家は性学を奨励する立場をとっていたのだ。弘化二年（一八四五）四月、荒海村に出演した田安家々臣原長三郎なども、村民中性学に入門している者と会って、これを激励した記録⁽²⁷⁾を残している。この田安家の支持は、幽学および性学の運命を救った大きな力になっていたことを強調しておきたいのである。

ここで注意しておきたいことがある。それは、天保十年（一八三九）九月、長沼（埴生郡）地方の性学が、稲葉領大森村（現・印西町）役所から、差し止め命令を受けたことである。これは「亥年の難」といって性学一派に大きな衝撃をあたえた事件で、稲葉領内の性学門人たちは幽学へ差出しておいた神文の返還をもとめられたのである。邪教のうたがいを受けたのが主な理由だが、長沼村には幽学の高弟で医師であった本多元俊や前記「在府日記」の筆者成毛五郎兵衛らがあり、元俊は印旛埴生地方性学派の総帥みないな地位にあったので、もし彼が性学を捨てるとなるとその影響が大きいので、幽学も大いに憂慮したのであった。しかし、どうやらその後了解がついたらしく、元俊らも性学を離れることなく済んだのであるが、この禁令を出したのを田安領大森役所と書いてある本が二、三あるのをわたしは目にしている。これは明らかにあやまりで、稲葉領とするのが正しいのである。稲葉藩は山城国淀に本城があったので淀藩とも呼ばれ、山城はじめ近畿各国と常陸・下総にも所領のある十万二千石の大名であった。稲葉氏は元禄十四年（一七〇一）から享保七年（一七二二）まで佐倉藩主であったが、享保八年（一七二三）淀へ転封になったのである。転封後に

も、印旛郡の大森・和泉・竹袋その他各村、埴生郡の長沼・北羽鳥・磯部その他各村に飛地をもっていた。天保十年当時の淀藩主は稲葉丹後守正守だったが、彼は天保九年（一八三八）寺社奉行になっていたので、立場上、性学に神経を使いすぎたのかもしれない。稲葉領大森役所から禁令が出された時には、長沼村の本多元俊も、荒海村（田安領）の前記糸川平右衛門も行状を乱したが、幽学の警戒によって改心するにいたるのだが、例の嫌疑一件の際の元俊の身分調査書中に、「隣村荒海村田安殿役所免許の性理学教導御引受立罷在候」⁽²⁸⁾とあり、また、右平右衛門の同様調査書中に、「領主田安殿役人廻村の度毎に荒海村幡谷村のもの共性理学弥々丹精可^キ相学^ツ由、村役人度々申渡有^レ之」⁽²⁹⁾とあるのによって考えても、田安家のほうは一貫して性学奨励の線をすすめていたことが分り、それが稲葉藩の態度をかえさせるようになっていったように推察されるのだ。ともかく、田安家が性学擁護の方針をとったことは、幽学らにとってきわめて心強いことだったにちがいないと思われる。

7

ところで、性学のメッカともいうべき長部村は清水領であったが、清水家はもちろん、田安・一橋両家とともに御三卿の一であった。この清水家が性学を奨励し擁護したことはいうまでもない。嘉永元年（一八四八）二月には、長部村を模範村として表彰したことが、何よりも雄弁な証拠といえるだろう。これは、稲葉領で禁令を出した時から九年後にあたる。清水家では、長部村を表彰したに止まらず、自領の各村に対しても、長部村を学んで改革させようとしたことは、前引の探索書中に、「先年御褒美も有^レ之候砌、清水領村々右長部村の風を学び、丹精可^キ致^ス旨村々へ書付印形^{いんぎょう}すべて御降し被^サ下、清水様より御申付有^レ之候儀に御座候事。」⁽³⁰⁾とあるのによって察知できる。これは、清水家が田安家同様、性学に関してかなり積極的で、前向きな姿勢をとっていたことが想察されることである。嫌疑一件の際、幕府か

ら性学について意見を徴されたの対して、田安家は、「性理学と唱へ候は元来朱子学にて、異説並利欲箇間敷儀不_レ相聞_一、愚昧のもの其善道に赴候儀会行致安き様講釈致し候儀にて、行々村々為_レ可_レ相成_一筋に相聞候」(31)と答え、また、清水家からは、幽学身分について、「幽学儀、何方の者かも不_レ相知_一浪人に無_レ之、武家厄介人の趣にて、其武家より村役人への書付も差出し候得ば、全く無宿者に無_レ之間敷、急度外村々にも止宿逗留為_レ致候間、長部村において其通り差置き候」(32)と、高松彦七郎が身分保証をしているから、全くの無宿者ではないだろうと、責任のがれの口調ではあるが、幽学の弁護をしているのである。これらの証言が性学および幽学の救護に、かなりの力になったろうことはじゅうぶんに想像できるだろう。こうして、幽学は無宿者という汚点そのものを消去するわけには行かなかったが、浪人で武家厄介人つまり幕臣高松彦七郎の弟という身分を保証され、士分としての裁きが受けられるようになったのである。

さて、幽学一派が嫌疑を受けるにいたった所因について、研究者から見おとされていることがある。それは、富士講との関係である。前に、八州役人の手先が長部村の教導所について、あらぬことをこしらえあげて報告していたと伝えた門人弁疏書の中に、「大普請の節士取残し置候を富士の形に築山相仕立候由申触し」という一節があったが、右の傍点のところは、見のがせない意味をもつところだ。つまり、性学が御禁制の富士講の一派だと疑われていたことが分るのである。富士講はいわゆる民衆宗教の有力な一派で、そのもと山岳信仰からおこり、富士山を神聖なものと考える呪術性の強い宗派で、戦国時代の行者長谷川角行を開祖とするものだが、その後、江戸の中期に食行身祿なるものが出で、身祿派がおこり、この派は呪術性を払拭して、信仰を内面化するとともに民衆の生活教化の方向にすすみ、さらに幕末になって小谷祿行(三志)が出て、江戸を中心とする関東各地の農民町人から武士階級の中まで信者を拡げ、全盛期といわれる天保期には七万と称する大組織にまで成長していた。この派は信仰の象徴として富士の形を模造して崇敬する風習があり、江戸の町内にもいくつ

つくられていたのである。また、この派は封建体制を賛美し、知足安分を教義とし、社会奉仕の実践を奨励し、架橋とか道路普請とかに積極的な活動を示したのである。しかし、幕府では富士講一派が大きな組織に発展し、時には政治的運動に走るのを警戒し、しばしば弾圧の令を下したが、嘉永二年(一八四九)九月、徹底的な禁圧処分を受けるにいたったのである。その因由について、村上重良氏は「その組織が下層民衆の独自の結合であり、しかも、幕府が多年にわたってうちたてた宗教秩序をおびやかす勢力に発展しつつあることに深い危惧の念を抱いていた」(33)ためであったとしておられる。これはそのとおりであろうが、氏はまた「精神運動としての不二道(富士講の別称)は、これと前後する二宮尊徳の報徳運動や大原幽学の性理学の運動と、共通の地盤に立つものと考えられる」(34)とのべておられるけれども、これも肯定すべきことであって、尊徳が小谷三志の思想に深い共鳴の意を示しているのは周知のとおりである。幽学はどうだったか、はつきりつかめないところがあるが、富士講と性学との共通性はいつくかあるように思われる。幽学は三教(神儒仏)一致を唱えていたが、富士講も神儒仏いずれにも属しない宗派ということで疑いを受けた点があるので、性学もあやしいとされたところがあつたかもしれないのである。幽学の教義には朱子学のほか陽明学からも禅宗や神道からも、いろいろな思想を取りこんでいるが、たとえば、「性は天地の私の別神靈」という考えなどは、黒住宗忠のおこした黒住教という「分霊」に近いし、また、幽学は慢心を強く戒めたが、これも黒住教で重んじたところだ。幽学の性学が、幕末の民衆宗教が生み出された同じムードの中で発生したことを思えば、いろいろな共通性があるのも当然かもしれない。幽学は門人たちの行状が乱れると、断食をやってこれを改心させるようにしたが、この断食方法は富士講の指導者がよくやった教化法であつた。幽学が富士講の真似をしたとも思えないが、はたから見れば同類項と考えられたかもしれない。富士講の信者が急激にふえた原因は、食行身祿が「我と我名をさして身祿といふにはあらず、身直にろくにならん」といって、弥勒的往生をとげたその「入定」が立派であつた

ことにあるといわれるが、幽学がその殉教の死をとげたあと、非常に性学が隆盛になったのは、身祿のばあいとはそのスケールにおいては格段のちがいがあっても、底に相通するものがあつたかもしれない。幕末の日本に全国的な雰囲気となっていた宗教的、というより俗神的な信仰の空氣が性学を盛んならしめたと考えられるのも、あながちまちがいはいいないようだ。合理主義をふりかざした幽学も結局は右のような反合理的なものに支えられて、民衆の神たりえたのであるかもしれない。

わたしははじめに、幽学が自殺に追いこまれたのは、浪人武士として多くの民衆にふれたからであるという見かたを披瀝したが、それで思い出すのは、奈良本辰也氏の著書「日本歴史の水源」に書かれている山形清兵衛という武士の話である。彼は四国宇和島十萬石の藩主伊達秀宗（仙台藩主政宗の子）に仕えた附家老であつた。彼は「如何にも武士らしい剛直無比な人物」であり、また「大變な民政家」であつたという。当時、宇和島の領内は疲弊しきつていたので、彼は民生を主として、もっぱら人民寄りの政治を行なつた。つまり、彼のやり方は「武士の生活を押えることで、庶民の生活を保とうとした」ものだった。いわば、これは二宮尊徳式のやり方である。このため、清兵衛は多くの武士から憎まれ、切腹に追いこまれてしまったのである。もっとも、秀宗は後に悔いて、清兵衛を神に祀つたということだ。（35）

以上は奈良本辰也氏の伝えるところだが、ついでにもうひとつ、これは慶応四年（一八六八）七月（實際は明治元年というほうが正しい）のこととして、「幕末動乱の記録」という本に出ている話だが、その頃、房総三州の鎮撫方を命ぜられた幕臣の信太歌之助という人が、政治のやり方がよろしくないということで召捕られて、江戸伝馬町の牢に入れられたことがあつた。歌之助はその事情を、次のように語っているのである

「私は誠心誠意を以てあの地方を鎮撫いたしましたところが、頗る良い塩梅に事が行われました。そうすると、総房の民百姓が私の申す方のことはよく命令を聞きますが、藩の命令は一向聞かぬ、もつ

とも、総房は小さい大名ばかりであります、百姓が私の言うことは聞くが、藩の命令はちつとも用いぬというところから、そのために、諸藩で信太という奴は謀叛人だというような評判を立てられて、遂に小藩が六、七藩挙つて大総督参謀に信太は叛逆を謀ります、早く今のうちに取り押えておかなければ大事が出来ますということに申し立てたのであります。それで、私に向つて官軍をお差し向けになつて召捕らるるということになつた。」（36）

山形清兵衛は一藩の家老職であり、信太歌之助は総房三国の鎮撫方であり、いずれも相当の身分をもつ高級職にあつた。それが、人民サイドの政治をやつたが故に処分にあつたというのは、結局は人民というものがもっぱら支配階級のためにある存在だつたことをよく示している。人民の味方になることは、武士階級への反逆であり、したがって、国家への謀叛であつたわけだ。一介の浪人たる大原幽学が、多くの民衆に接して、ヨコのつながりをつくることは、それが体制側の指導精神に忠実なやりかたを取つたとはいいいながら、結局は排撃され処罰される運命にあつたというよりはかはないだろう。封建体制の非情ということであろうか。

注

- (1) 『共同研究・明治維新』所収・布川清司「農民の意識と行動」九〇頁
- (2) 『日本思想大系52 二宮尊徳・大原幽学』解説・「二宮尊徳の人と思想」（奈良本辰也）四〇五—四〇六頁
- (3) 同右、四二一—四二二頁
- (4) 同右、四三八頁
- (5) 家永三郎「日本道德思想史」一九〇頁
- (6) 『講座・日本文化史・第六卷』第三章「近代社会への志向とその特質」（安丸良夫）二〇九頁
- (7) 筑波常治「創造者たち」二宮尊徳とその弟子たち、一二四頁
- (8) 『日本の思想18 昌益・仲基・梅園・梅岩・尊徳・青陵集』解説・「二宮尊徳」（小椋嶺一）五〇頁
- (9) 八木繁樹「二宮尊徳の実像」一五二頁
- (10) 実際には幽学の教化は安房から上総へ下総へとひろがって行き、上総の屋形周辺にも相当数の門人がいたが、ここではそれらは省略した。
- (11) 成毛五郎兵衛記「在府日記・亨の巻」嘉永六年十月五日の項

- (12) 「幽学全書・第二版」附録・一五九頁
- (13) 同右、一六八頁、(門人弁疏書)
- (14) 同右、一七二頁
- (15) 同右(幕府探索方調書二二一―一二三頁)
- (16) 「大原幽学全集」七一四―七一五頁(弘化二・四・七、幽学書簡、平太郎留蔵あて)
- (17) 「幽学全書・第二版」附録・一四五―一四六頁
- (18) 同右、一一八―一九頁
- (19) 同右、一七九―一八〇頁
- (20) 名古屋郷土文化会『郷土研究・第二九卷第三号』所収・水谷盛光「大原幽学出自考説」
- (21) 「豊明市史」(昭和五〇・三・三一刊)一七三頁
- (22) 「幽学全書・第二版」附録・一八一頁
- (23) この幸八郎および遠藤家の由緒について、安政五年三月十九日、高松彦七郎から高橋捨次郎・伊佐由兵衛兩人(いずれも幕臣)に出した書状(幽学の自殺を報じたもの)には、左のように書かれている。
「幸八郎儀、当時若輩にて平百姓には罷在候得共、一体、家筋の儀、苗字は遠藤と唱へ、下総にては名高き千葉家の末に有之候旨申伝候得共、本家断絶にて確と致し候書物等も無之、相分り兼候由、右の家筋村内に七軒程有之候由、及承候。」(「幽学全書・第二版」附録・二二四頁)
- (24) この論文の題名は「大原幽学伝雑考」で、署名は「鵜田東臯」となっている。
- (25) (26) (27) これらの文書は、成田市荒海・吉岡慎平家に残っている。
- (28) 「幽学全書・第二版」附録一六三頁
- (29) 同右、一六五頁
- (30) 同右、一四六頁
- (31) 同右、一七八頁
- (32) 同右、一七七頁
- (33) 村上重良「近代民衆宗教史の研究」七一頁
- (34) 同右、七四―七五頁
- (35) 奈良本辰也「日本歴史の水源地」二二七―二二九頁
- (36) 八木昇編「幕末動乱の記録」(史談会連記録)一九五頁